

日本YMCA同盟

THE  
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.785 2019

2019年4月1日発行（毎月1日発行）  
1947年10月27日 第三種郵便物認可  
本体価格45円（外税）（送料62円）  
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟  
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号  
TEL：03-5367-6640 FAX：03-5367-6641  
URL：http://www.ymcajapan.org/  
発行人／神崎 清一 編集人／山根 一毅  
印刷／あかつき印刷株式会社



# 共に歩むために学ぼう



式典の様子。ステージ上には韓国語で書かれた独立宣言本文

## OPINION

### 2・8独立宣言から100年

佐藤 飛文(明治学院中学校・明治学院東村山高校教諭)

2019年2月9日、2・8独立宣言100周年記念国際シンポジウムが東京の在日韓国YMCAで開かれ、250人を超す参加者が集まりました。2・8独立宣言は、日本の植民地支配下にあった朝鮮人留学生たちが東京で発表した独立宣言です。

第一次世界大戦中に提唱された「民族自決の原則」は、植民地の人びとに大きな希望を与え、独立運動が盛り上がる契機となりました。1918年12月、朝鮮留学生学友会の忘年会で独立運動の提案が出されました。翌1919年1月、朝鮮青年独立団が組織され、独立宣言書と決議文、民族大会召集請願書が作成されます。そして2月8日、朝鮮留学生学友会の総会が東京朝鮮YMCA（現在の在日韓国YMCA）で開催されました。講堂は数百人の朝鮮人留学生であふれかえったそうです。総会は独立宣言集會に切り替わり、2・8独立宣言書が発表されました。警察官たちが乱入して会は強制的に解散させられ、指導者たちは検束されましたが、2・8独立宣言書はソウルにも伝えられ、それが3・1独立運動へとつながっていきました。

残念ながら、この2・8独立宣言のことはあまり知られておらず、日本の小中高の歴史教科書にも登場しません。しかし、私が勤めている明治学院中学校では、毎年社会科の校外授業で在日韓国YMCAを訪問し、2・8独立宣言記念資料室を見学しています。2・8独立宣言書を起草した李光洙や東京朝鮮YMCAの総務だった白南薫が明治学院の卒業生であり、英訳された独立宣言書を添削したランディスが明治学院の宣教師だったからです。

100年前にYMCAで発表された2・8独立宣言が朝鮮の3・1独立運動の導火線となり、そして中国の5・4運動や台湾の議会設置運動、インドのガンディーたちのサティヤーグラハ運動へと、非暴力の民衆運動がアジアに広がって行った歴史を、わが校の生徒たちと、そしてYMCAの皆さんとも共に学び、探究していきたいと願っています。

(OPINION…意味は「意見・見解」など。『THE YMCA』では毎号、関係ある団体・個人からの意見や提案を掲載します。)



2・8独立宣言、そして3・1独立運動……私たちは歴史のことがらとして、それが何かを「知っている」かもしれませんが。しかしその時代、日本が植民地として隣国を支配していたという事実から目をそらしてはいけません。

もし、その当時私たちが生きていたら、どんな考えを持ったでしょう。隣人である彼らの力になり、寄り添える人になれていたでしょうか。

隣人を抑圧していた過去から学び、未来に生きる人たちが近隣アジアの国々と手を携えて共に歩めるようにするために、今、YMCAにつながる私たちが何をしていく時なのか、考えてみましょう。



かがみ  
歴史を鑑として、固く手を結ぶために  
～2・8独立宣言100周年～

在日本韓国YMCA 田附 和久

植民地統治下で最大の独立運動であった3・1運動の導火線として知られる2・8独立宣言が、東京朝鮮（現在の在日韓国）YMCA会館で発表されてから100周年を迎え、「2・8独立宣言第100周年記念式」が在日韓国YMCAで開催されました。式には韓国の政府長官、国会議員といった来賓をはじめ、日本のYMCA関係者を含む350人を超す参加者が集まりました。

2・8独立宣言は、留学生たちが宗教や出身の違いを超え「誰もが参加できるYMCA」に集ったからこそ発表できました。そして、独立運動の現場となったYMCAが今、韓国人と日本人が共に集い、和解と共生のためのさまざまなプログラムを展開する場となっており、歴史を振り返れば奇跡のようです。私たちはこれらの事実を記憶し、今も憎悪や絶望の中に生きている世界の仲間たちに希望として伝えられるよう、今後も働きを続けたいと願っています。

3・1運動100周年記念式において文在寅大統領は、「過去は変えることができませんが、未来は変えることができます。歴史を鑑として、韓国と日本が



新しくなった「2・8独立宣言記念資料室」  
今後も学びの機会を提供できるよう、記念資料室の運営やセミナーなどのプログラム開催を続けてまいります。

固く手を結ぶとき、平和の時代は私たちのすぐ近くに訪れることでしょう」と述べました。

在日本韓国YMCAでは、100周年を記念して会館内の「2・8独立宣言記念資料室」を移設・拡張してリニューアルオープンしました。歴史を鑑としたいと願う方たちに

これからの100年に向けて

日本YMCA同盟インターン 高 彰希

2・8独立宣言から100年がたった今、日・韓・在日社会の未来を語る上で、さらには東アジアや世界情勢を見通す上で、2・8独立宣言を忘れずに多くの人びとと共有していく必要があります。しかし多くの青年たちは歴史を学ぶことを避けようとしています。なぜなら歴史を学ぶことは、必然的に加害者の歴史を学ぶことにつながるからです。私は、同じ過ちを繰り返さないために、加害者と被害者という構造を超えて、共に未来の平和を語るために歴史学習が必要だと考えます。



日中韓YMCAユースピースフォーラムにて  
(後列右から2人目が高氏)

2・8独立宣言は、日本の植民地支配、東アジアへの侵略に対する抵抗であり、また当時の国際情勢に反応して民族自決主義による民族の独立を宣言した運動でもありました。ここで見方を変えると、2・8独立宣言は日本社会の中で抑圧されていた社会的弱者によって行われた運動であり、そこには日本の知識人も参加していたことに気がきます。

韓国・在日の歴史として2・8独立宣言が語り継がれている中で、日本社会や東アジアに横たわるさまざまな問題を解決する一つの糸口として、社会的弱者が社会の矛盾に抵抗し、社会変革のために声を上げたことを記憶しなければなりません。

これからの100年、過去の歴史と真摯に向き合い、人の痛みを心に寄せ、未来の平和のために国や世代を超えてお互いを理解する時代にしていきたいです。

Positive Net NEWS

ポジティブネット…互いを認め合い、高め合うことのできる、人の善意や前向きな気持ちによってつながるネットワーク

大阪YMCAが運営する  
全国初の公設民営型中高一貫校が4月に開校！

学校法人大阪YMCAが運営する、公設民営型中高一貫校である大阪市立水都国際中学校・高等学校が4月に開校します。この学校では、政府の日本再興戦略のもと文科省が全国で200校の開校を目指している国際バカロレア（IB）教育を取り入れた先進的な教育を行います。IB教育にはYMCAの理念と親和性があり、「世界の複雑さを理解して、そのことに対処できる生徒を育成し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付ける」教育です。

大阪YMCAはこれまで、世界に広がるYMCAのネットワークを活用して日本人と外国人のユースが共に議論をするグローバルユースカンファレンスの実施、IB教育を採用したインターナショナルスクールの運営などをしてきました。YMCAが培ってきたノウハウとネットワーク、青少年に関わる教育活動が総合的に認められ、同校の指定管理法人に指名されました。

本校は、「社会に貢献する協創力をみがく」を教育目標とし、IB教育や21世紀型教育を取り入れ、3つの教育活動①英語教育、②国際理解教育、



新入生を待つ教職員の皆さん

③課題探究型教育に重点におき、さらにはコースの一つに国際バカロレアディプロマプログラム（IBDP）を持つ新しいスタイルの学校です。大阪YMCAが挑戦する新しい教育にご期待ください。

大阪YMCA 眞浦 史郎

第7回とちぎYMCA杯  
エンジョイドッジボール大会開催

2019年2月3日、栃木県体育館にて、男女混合の部20チーム・ジュニアの部8チーム、延べ460人を超える子どもたちが参加して、ドッジボール大会が開催されました。「一本キャッチ」「一本集中」などの声援があちこちから聞こえ、一人ひとりが元気に試合を楽しんでいました。

今回はとちぎ、盛岡、千葉YMCAのユースボランティアリーダー約30人が大会運営に携わりました。選手誘導や試合記録だけでなく、閉会式にはリーダーからピンクシャツデーについてのメッセージがあり、「いじめについて考える」という意志を表そうと、大会参加の子どもたち全員、指導者、審判員、大会運営スタッフを巻き込み、ピンクの紙を持って写真を撮ることができました。



試合中、迫力満点のボールさばき

リーダーたちは子どもたちの真剣な姿を見て多くの刺激を受け、中には感動して涙する人もいました。

聖書に「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマの信徒への手紙12章15節）という言葉があります。

大会のさまざまな場面で、たくさんの方が共に喜び、共に泣いていました。私はこうした瞬間一つひとつを大切にしていける必要があるとあらためて学びました。また、リーダーたちが大会運営をしていく中で、「こんなことしたい」「やってみたい」という思いがふくらんでいく様子を見て「ユース・エンパワメント」の可能性を感じることができた大会でもあったと感じています。リーダーたちが自ら行動を起こす動機づけになればと期待します。

とちぎYMCA 荒井 浩元